

見られる老いと話される老い

— 視覚文化・聴覚文化と老い —

山田 等

はじめに

老いについて考えるとき、私たちはいま、老人が「異文化」であったり、そうでなかったりすることに気づきはじめた。それは、老いを経験していないと感じている世代が、老いを自分のもつ文化とは異なったものだと想定しているからであり、その根拠は、そうした世代が老人をある特定の視点から見ることによってなされる。他方、老いを異文化でない自分たちの文化と共通するあるいは連続するものだと感じるのは、身近な老人の話の聞いたりして自分と同じ感性をかれに見出したことなどによる。

ふたつの感じ方は、老人の外見と内実の落差だと言えよう。それは、他者から見られた外見あるいは表相という問題と、老年自身の主観的な内面の問題のちがいとしてとらえられよう。近年おびただしく出版される老人関係の書物の中で、バット・ムーア (Patricia A. Moore) 『変装——私は三年間老人だった』 [Moore, 1985] は、さきの落差を考えさせるものである。『変装』は、工業デザイナーである26歳の著者が、老人のためのデザインを研究するために、大学院で老年学を学びながら、3年間老人に変装して、「年をとる」とはどういうことかを参与観察した記録である。そこで、著者は、まず、どのようにして老人に変装するか、いいかえればどのような人が老人と見られるのかを試行し、その老人が周囲の人にどのように扱われるのか、そのとき当の老人はどのように感じるのか、を報告していった。小論は、これをテキストとして、現代社会における老いのあり様を、他者から見られる老いに着目しながら考察していく。他方、シャロン・カウフマン (Sharon R. Kaufman) が、『エイジレス・セルフ』

[Kaufman, 1990]においてもちいたインタビューという方法が、なぜ老年の主観的な内面を知るてがかりとして有効なのかを、『変装』と対比してかんがえてみたい。この考察は、老年研究であると同時に、現代社会論、ラベリング論の応用の側面をもつものである。

変装——老人に見られるということ

ムーアは、老人に見られるためにどのような工夫をしたのか。彼女は、メイクアップ・アーティストの友人と相談しながら、まず、自分の顔とからだに、つぎのような変装をほどこした。

目のまわりの皺であるからすの足跡をつけ、目の下をたるませ、首筋にたるみと皺をつけるために皮膚を模造した。そして、白髪のかつらをつけ、老人の格好にぴったりと思われるキャンパス・シューズを履き、古い麦わらのバッグをもち、老人に適当なブラウスとスカートをはいた⁽¹⁾。そして、杖でからだをささえ、足に包帯を巻き、若い手をかくすために白い手袋をし、胸を平らにするために腹巻をした。さらに、ガラスの古い眼鏡をつけ、歯を黒ずませ黄ばませた。

彼女はのちに改良を加え、補聴器をつけたり、若々しい目にベビーオイルを塗って目にかすみがかかったようにしたりした。また、塩と水を混ぜたものを喉の奥に6時間つけてしゃがれてがさがした老女の声などをつくっていった。また、時々、歩行補助車や車椅子を使った。

さらに、動きを、演技ではなく実際に制約するためにつぎのような工夫をした。指にテープを巻いて不自由にしか曲げられなくした。胴から片方の肩にかかる形の布製の胴巻きをつけて、腰が曲がった格好にして、まっすぐに立ってられないようにした。時々、小さなこぶを真似るためその胴巻きの下に綿のつめものを入れたりして「おばあさんのこぶ」と呼ばれる背中にちよつとしたこぶのある格好をつくった。また、小さな副木を膝の裏に入れて、包帯で固定し、足が広く開きすぎるのを防ぎ、若々しい動きを抑制した。そのようにして、歩幅をせまくして、用心深く、のろく歩くことを可能とした。

これらの変装によって、彼女は、ごく身近の友人たち、老年学の専門家たち、町で出会う人びと、本物の老人たちに、自分を老人として呈示することに成功した。彼女は、「私は今、人目につくレッテルを貼っており、そのレッテルには『老人』と書いてある。そして、そのレッテルのおかげで人びとの対応の仕方が変わったのだ。」と書いた〔Moore, 1985: 49〕。

彼女の変装の成功から、私たちは、現代社会において、老人と見られる人の諸要素のリストを手に入れることができる。上記がそれである。「老人として判定する」という視点から見た場合の、このリストの特徴は、視覚を重要視している点である。声をのぞいて先の諸要素のすべては、他者に見られることによって老人と判定される。老人問題を論じる書物のなかでは、多くのばあい、暦年齢や引退や諸活動能力の低下が、老人の指標としてあげられるのとは、異なっている。実際、ムーアは自分が演じる老人の年齢を脚本家のように特定せず、ただその外見によって漠然と老人であることを呈示している。

彼女は変装によって、自分自身の外部の皮膚を文字通り全面的に覆った。顔は化粧によって、手は手袋によって、足は包帯と靴下によって。目さえもオイルで濁らせて、本当の自分を覆い隠したのであった。覆い隠すことによって、表されたのが、老人という外見・表情であった。

このなかで、彼女がとくに重要視しているのが、顔である。「もし、顔が人を納得させるようにできていなかったら、他のすべてのものはほとんど意味がなくなってしまう。」〔Moore, 1985: 82〕。他者が人を判定するとき、顔が最も重要であることは、経験的に理解しよう。ポーヴォワール (Simone de Beauvoir) は、不愉快な経験によって、自分の年齢を知らされた女性の例をあげている。「あるとき、ドルモアが街を歩いていると、その姿(シルエット)の若々しさに騙されて一人の男が後をつけてきたが、追い越しざまに彼女の顔を見て、話しかける代わりに歩調を早めて去ってしまった……………」〔Beauvoir, 1970=1972: 340〕。この例からも、顔の重要性が知られよう。

そして、「他人の眼ざしが彼女を別の者(老人)に変身させた」のである〔Beauvoir, 1970=1972: 340〕。逆にいえば、ムーアは老人に見える先の諸要素をもちいて、他者の視線をコントロールしようとしたのであった。

他者の眼ざし

私たちは現代社会において、他者が何者であるかを、外見という表相によって判定している。それは都市の特徴でもある。共同体社会ならば、人びとは特定の個人の身分・所属・家族を知っている。かれは、共同体のなかで、一定の空間的・時間的位置をもち、好むと好まざるとにかかわらず、安定している。そうしたなかで、人びとは対面的に知り合っており、それぞれの所属や身分によって、付き合い方などの社会関係が決定される。

これに対して、都市化された社会では、人びとは互いに知らない匿名性のなかに生きている。そのなかで、他者と接触しなければならないときや、接触したいと望んだとき、人びとは他者をその表相で判断しなければならない。この結果、人びとにとって「見せること」が社会関係を形成するうえで重要性を増してくる。「他者たちのまなざしを操作」することが、重要になってくるのだ〔見田、1979：30〕。それは、「表相が内面を支配する」という自覚が人びとの内面にあるからだ。それは、化粧やアクセサリから整形美容にいたるまで、程度の差はあれ、「よい表相」を他者に見せようとする。

これを見られる側からいえば、かれの内面はどうであれ、かれは他者にとって、表相によって判定された限りでのかれでしかない。ムーアは、老人という表相で、それを実験し成功したのであった⁽²⁾。その結果、ムーアは、他者が表相で内部を判定する、という事実にも突きあたる。

老人というレッテルの結果、ムーアが体験した他者が選択する行動は、次のようなものである。①頻繁に言われる「お手伝いしましょうか」という言葉で表される手助けの対象としての老人。②隣あった壮年者などから話しかけられることもない避ける対象としての老人。それは、老人との応対は時間と手間がかかるので避けたいと思う店員と老人の間でも見られることである。さらに、それは老人を無視される存在、社会的に「追放」される存在としての老人にきつく。③襲われ金品を略奪される犠牲者という対象としての老人。

ここに示されたのは、他者が老人の内部にもつ能力を推定して、老人を無力な存在として判定した結果、とられた行動である。ムーアは、ハーレムで少年たちに襲われたとき、なすすべもなく無力に身をさらさざるをえなかった。そ

のときの無力感は、家の外に出たならいつ何が起こるかもしれないという不安をみちびき、老人たちを家のなかにひき籠もらせるのである。

ジャン・アメリー (Jean Amery) は、老人が自分を見出すのは、「他人の眼差しの鏡像としての、潜勢力のない被造物としてである」〔Amery, 1968=1977: 81〕という。彼は、「世界と財産は他人がおのれとおのが場所および所有を争うばあいにもみある」といい、そうした「不条理にしかつ矛盾した」ことも、その争いから外れた「老化者をまっしてはじめて完全に意識される」のだと言う。老年は力なく、所有すべき存在ではない、とされるのである。これが、老人にたいする他者の眼ざしである。

聴覚文化の没落

都市化社会では、さきに述べたように、他者の表相による判断が不可欠になる。それも、瞬時の判断が必要とされる。これを瞬時におこなうためには、視覚による判断がもっともてっとり早い。他者がだれであるかを判断するときを想定してみてほしい。私たちは、まず、他者の身なりやしぐさから彼がだれであるかを判定しようとする。見せられた名刺から、一瞬にして他者を特定の存在に置きうる。耳から聞こえる他者自身による自己紹介では、おおくの時間がかかってしまい、その間、判定者はその他者をじろじろと見ることになりかねない。現代社会は、視覚が聴覚その他の感覚にたいして優位の社会である。

ところで、未開社会や伝統社会における老人の優位は、じつは、聴覚文化の優位によっていた。老人が、そうした社会において尊重される原理のひとつは、老人の知恵が社会を維持するために有用だからである。その知恵は、老人からの口承によって得られるものである。それは、老人のからだと一体になっており、その知恵の尊重は、老人の尊重に重なる。しかし、近代社会になって、それらの知恵は二重の意味で価値を失った。ひとつは、工業などの生産の場では、老人の知恵よりは技術革新による新しい知識の吸収が重要視された。ふたつには、知識の伝達の方法が、印刷物である文書などの視覚に訴えるものに代わっていった。それらは口承の個人的で不確実な方法より、大量に確実な方法であ

ると考えられたのである⁽³⁾。

太古において、たとえば、ことばとは話され聞かれたものである。そのことばが、書かれ、さらには印刷の発達によって、しだいに多くの人の目に見られるようになった。情報は、ウォルター・オング (Walter J. Ong) の言うように「記憶から書かれた記録へ」〔Ong, 1982 = 1991: 199〕移っていき、その信頼性についても、話される声より書かれた文字に重きがおかれるようになっていった。この情報伝達の方法における変化は、人びとの思考や表現に影響をあたえずにはおかない。

オングは、声の文化における思考と表現のいくつかの特徴をつぎのようにまとめている。(1) 累加的であり、従属的ではない。(2) 累積的であり、分析的ではない。(3) 冗長ないし「多弁的」。(4) 保守的ないし伝統的。(5) 人間的な生活世界への密着。(6) 闘技的なトーン (なぞなぞに見られるような)。(7) 感情移入的あるいは参加的であり、客観的に距離をとるのではない。(8) 恒常性維持的 (現在のなかで生きており、その現在は均衡状態のうちにみずからを保っている)。(9) 状況依存的であって、抽象的ではない。

声の文化の衰えは、それにとまなう思考と表現をも衰退させる。冗長に、累加的・累積的に日常の生活世界を語ることよりは、簡潔に、分析的に抽象的な世界を、過去と現在の因果関係をはっきりと客観的に語ることが、のそまれてくる。このことを世代に当てはめてみると、声の文化に親和的なのは、子どもや老人たちである。老人や子どもが、繰り返し語ることや、自分の話すことへの感情移入の強さ、いつも現在を語る姿を思いおこしてほしい。これは、文字の文化が、壮年に親和的なのと対照的である。近代とは、声の文化の衰退によって、老人たちを社会の背後に退かせた社会である。

話される老いの発見

ところで、老年研究に従事するものは、上記の声の文化の特徴としてあげられた多くが、老年の内面と共通していることに気づくだろう。

カウフマンは、老人が自分自身について語るときには、「高齢化とともに訪

れる肉体的・社会的変化にかかわらず維持されるアイデンティティが前面に押し出される」と言い、それを<エイジレス・セルフ>と呼んだ。彼女は、60人におよぶ老人たちとのインタビュー、とくにそのなかの15人にたいしてはひとりにつき8～15時間にわたる長時間のインタビューをおこなった結果、この概念を発見したのであった。<エイジレス・セルフ>の核心は、老人がそれぞれの人生において、いくつかの「テーマ」をもち、それによって幼年期から現在までの人生に一貫性をあたえている、ということである。そのテーマは「情緒的結びつき」であったり、「信仰」と「冒険」の葛藤であったり、「芸術的創造」であったりする。私たちはそこに、ある固有のテーマに、感情移入的・状況依存적であり、客観的に距離をとるのではない、現在に生きる老人たちを見いだすことができる。そして、長時間のインタビューのなかで、それらのテーマなどが累加的・累積的に冗長に語られたことを想像できる。

私自身は、論文「老年期の楽しみとしてのダンス——E・ゴッフマンの饒舌体をつかって」〔山田、1990〕のなかで、ダンス愛好者たちのインタビューから得られたさまざまな発言を、冗長とも思えるほどに累積的・累加的に積み重ねながら、かれらの日常生活の場面における情緒や関心を浮き彫りにした。説明を納得いくまでするには多くの例が必要だが、ここではそのなかの一例をあげておこう。これだけからも、老人の話が累積的・累加的であることは知られよう。

「ダンスの楽しみはコミュニケーションですね。ええ、練習の合い間やそれがおわったあとの食事のときのおしゃべりですね。そのときはもうみんな対等ですし、肩書もないしね。そのほかには、リズムに乗ってからだを動かすことですね。……………それと、できないことができるってこともいいですね。……………ダンスをやって変わったのは、おしゃべりをするようになったことですね。センスがよくなりますね。……………」（68歳、Aさん、女性）〔山田、1990：6〕

大学の講義などで学生たちに身近なお年寄りから話を聞いてレポートを提出させると、学生たちははじめて自分の祖父母の人生や生活を聞いた、と言う。

そのうえで、かれらは、老人たちが「単なる年寄り」ではなく、さまざまな体験をもった人間だ、ということに驚くのである。そのとき発見されるのは、見るのではなく聞くことによって表された老い、話される老いである。

ムーアは、変装をしていた間、人びとの質問にたいして、なるべく本当のことを話そうと決めていた。彼女は、人にうそをつくことを心配していた。しかし、実際には、名前はバット・ムーアで、ニューヨークに住んでおり、子どもはいない、ひとり暮らしで、職業はデザイナーである、という簡単な自己紹介だけで、ほとんどの人は満足してくれた。この満足は、いいかえれば、ほとんどの人は老女であるバット・ムーアにたいして、それ以上の関心がないことを示している。ムーアは、飛行機のなかで中年の紳士がとなり合ったとき、かれが老女のムーアとの接触を避けたことを報告している。26歳のムーアであったなら、その紳士は、彼女にたいして、独身であるのか、今晚の予定はなにかなどについて尋ねるチャンスを待っていたかもしれない。また、食料品店の店員は、レジなどにならんだ老人は時間や手間がかかるだろうと推測し、すぐにいらいらする。老年にたいして、他の世代は忙しすぎるのだ。老年にたいして他の世代の人びとは、無関心であり、老人たちと話さない。

したがって、他の世代の人びとは老年たちの内面を知らない。ムーアが老女に変装して印象深く感じたことのひとつは、公園のベンチの上で交わされた老人たちの会話の調子が、ふつう考えられるように陰気でも絶望的でもなく、明るかったことである。また、変装さえしていれば、彼女が、独りでいたくないときや、自分が恐れていることや満足していることを打ち明けようとするとき、老人たちは常に彼女を仲間に入れてくれ、彼女のために時間をさいてくれた。老年たちは、他者に対して時間を使う喜びをもつ人びとなのである。具体的には、それは、他者の話を聞くこと、そして話しかけることである。このようにして他者にたいして時間を割くことが、人間の相互作用の前提であるのだ。

おわりに

老人たちが、老人同士の会話や、長時間インタビューなどで、他者に呈示するのはなにか。老人同士の会話から、ムーアはその話題のあかるさ、他者への思いやりなどを感じていた。ポーヴォワールは、老人ホーム居住のある婦人の発言、「わたしは自分が老いているとは少しも思わない。ときどき、わたしはおばあちゃんたちを助けてやる。それから、自分に言い聞かせる、でもお前さんだっておばあちゃんなんだよ、と。」〔Beauvoir, 1970: 346〕を紹介しながら、「他の老婆たちに対するとき、彼女はごく自然に無年齢なのである。」といっている。この婦人が呈示しているのは、年齢とはかかわりのない自分自身である。無年齢ということばから思いおこされるのは、カウフマンが呈示した<エイジレス・セルフ>という概念である。彼女は、老人たちが「自分が老人であることじたいには意味を見出していないこと」に気づき、<エイジレス・セルフ>という概念に思いいたった。人は、他の世代から「おまえは年寄りだ。」とレッテルを貼られないかぎり、老いを自分自身の重要な部分とは感じていないのではないか。

そのうえで、「たえまなく過去を再構成することによって、人間は自分自身についての統一感を保ち、現在の自分と有意味な関連があると思われる過去の出来事との結びつきを維持する。」〔Kaufman, 1990: 187〕—これが老人たちであり、人間なのではないだろうか。

私たちが、老年にとっても住みよい社会を構想しようとするとき、他者の話を聞く時間をもてる社会のあり方が要求されよう。それはまた、視覚ばかりを優位にする社会のあり方の変容をも要求するのかもしれない。

<注>

- (1) 老人に見える服装について、アメリカ合衆国と日本では大きく異なるであろう。しかし、どの文化においても「老人として見られる」一群の人びとがいる。この経験的事実から、若干の文化的差異はあるとしても、ムーアの報告は、日本においても有効だと思われる。

- (2) いうまでもないが、ムーアが見せようとしたのは、現代社会においては「よい表相」ではない。ただし、彼女の目的にとっては「よい表相」であったのだ。
- (3) 情報が口承から文字へ移り変わることについては、リースマンが『孤独な群衆』のなかで論じている。

<文献>

- Amery, Jean 1968 Über Das Altern, Ernst Klett Verlag.
 =1977 竹内 豊治訳『老化論』法政大学出版局。
- Beauvoir, Simone de 1970 la Vieillesse, Gallimard.
 =1972 朝吹 三吉訳『老い(上・下)』人文書院。
- Kaufman, Sharon R. 1986 The Ageless Self—Sources of Meaning in Late Life, The University of Wisconsin Press.
 =1988 幾島 幸子訳『エイジレス・セルフ』筑摩書房。
- 見田 宗介 1979 「まなざしの地獄」、『現代社会の社会意識』弘文堂:1-57。
- Moore, Patricia A. 1985 Disguised — A True Story, Word Books.
 =1990 木村 治美訳『変装——私は三年間老人だった』朝日出版社。
- Ong, Walter J. 1982 Orality and Literacy, Methuen & Co. Ltd.
 =1991 桜井 直文・林 正寛・糟谷 啓介訳『声の文化と文字の文化』藤原書店。
- Riesman, David 1953 The Lonely Crowd, Yale University Press, U. S. A.
 =1958 佐々木 徹郎・鈴木 幸壽・谷田部 文吉訳『孤独な群衆』みすず書房。
- 副田義也 1978 「主体的な老年像をもとめて」『現代のエスプリ 老年』No.126 至文堂:5-24。
- 山田 等 1990 「老年期の楽しみとしてのダンス——E・ゴッフマンの饒舌体をつかって」、『沖縄国際大学文学部紀要』第14巻第2号:1-20。

(やまだ ひとし)